

熊田貴之さま

修士課程修了生・赤坂キャンパスVOD 小野洋子（大学教員）

「クライアントの人生を共に考え、背中を押してくれる精神病院！

－ ぶれない信念と通じ合える説明ロジックが皆の心を自由にする。－

すごい実践家がいる！とVTR越しに唸ってしまった。今回は札幌での学会参加と重なり、キャンパスでお目にかかれなかったことが残念でならない。

熊田医師の何もかもが精神科医には見えない。これが私の第一印象であった。そして、その印象は講義が終わるまで、いや今も変わらない。7億円で親から精神病院を買い取り、「そこまでしないと変えられない・志を成し遂げられない」とエネルギーに語るその人のあり方は、私の知っている精神科医、精神科学の既成概念を大きく打ち破った。

話の内容そのものは、私が普段から想い描き、願ってきたことに通じることが多々あった。ただ、それを実践していることに、その1つ1つの歩みに、今でも進化し続けていることに、驚かされたのである。

忘れたくない話が次々と降ってくるので、ペンを走らせ、要所要所でVTRを止めて写真撮った。レジメがあるというのにね。少々自分の言葉でまとめているが、メモには、『CSはESから、患者ではなくクライアント、経営理念、組織風土作り、行動原理、運営の仕組み作り、「マズローの5段階欲求説」と「4つの自立」を用いた説明、ダウンサイジングとマネジメント、極めつけは「心の問題に脳の薬は要らない』などなどが連なる。

自ら8時間の拘束された体験の話では、亡き母が療養病院でミトンされた時や縛られた時のことが思い出された。私はキーパーソンでありながら無力で、看護師から同意を求められた時も頭を下げることしかできず、家で1人何度も泣いたっけ。

ゆきさんがおくってくださいました紹介資料に、「患者さんの生活を理解するには、私自身が医療界の外の世界を知らなければならない、暇さえあればビジネス雑誌を読んで勉強している」とあった。そうか、それで、お医者さまらしく感じないのか。

「夕涼み会に行きたい」という衝動に駆られた。熊田医師が外の世界に出てゆくように、私も精神科領域にもっと近づいて、精神疾患を抱えている方や寄り添うスタッフに接して、今の自分は何を感じとれるのか、これから何ができるのかを確かめたい。正直言って今の私は、精神疾患を抱えている人への接し方において自らの理想と現実ギャップがある。小心者の私は、多分、予測できないことが起こるかもしれないことに臆病なのだと思う。

小さな頃から精神病院の入院患者と慣れ親しみ、「心臓がない」と言われても驚かなかったという熊田医師、それこそが「地域に開かれている」ということなのだと思いに胸に響いた。

こちらが構えることなく、穏やかに普通に接することができたら、きっと相手も警戒したり不穏を抱いたりせずに、対話ができるに違いない。その領域に到達できたら、多様な社会人学生が集う担当授業も憂いなく進行できるのではないかしらん、とも思った。亡き母との残念なやりとり・その負の財産も糧にして、さまざまな“その人らしさ”と向き合い、未来を見つめて歩いてゆけたらいいな。

末筆になりましたが、大変貴重なご講義をありがとうございました。雑駁な文章をお許してください。

追伸：聞き漏らしたかもしれませんが、「夕涼み会」の参加方法を教えてください。ホームページを拝見したのですが、分かりませんでした。よろしく願いいたします

~~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*

小野洋子様

精神科医に見えない・・・よく言われます(笑)

それどころか医者に見えないとよく言われます(笑)

地域に開かれた精神科医療の重要性に対する僕の意識は、まさに幼少期体験が始まりです。当たり前に出会った彼らが、大人になってみると、とんでもない状況にさらされていました。

医療スタッフを観察すると、熱心にカンファレンスを開き、本人たちのことをよく考えているようにも見えましたが、「本人に聞けばいいじゃん」と思うことまで、勝手な思惑で想像していました。

そこには、小生では理解できない、“何かおびえのようなもの”が存在するのだと思います。

20年後100年後の精神科医療を変えるためには、一人一人が幼少期から彼らと気軽に触れ合える機会もまた必要なことなのかなと考えています。

残念ながら夕涼み会は、まだ、お世話になっている地域の方をご招待するというレベルにすぎないので自由に皆様をご招待できるようになったら、ご招待いたしますね。

いつもお世話になっている分、無料で楽しんでいただくというコンセプトなので、肉代もばかにならなくて・・・(笑)機会があればお越しいただければ、我々も自身を省みるきっかけとなります。

ボランティアは、今回の会はすでに決まっていますが

クリスマス会などでも、随時募集しておりますので、

機会があればどうぞよろしくお願いいたします。